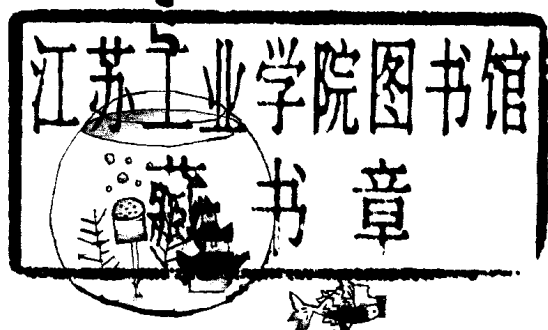


柴田元幸

死んでいる
かしら



死んでいるかしら



柴田元幸
イラスト
キョクニシラキとし

新書館

●著書

柴田元幸（しばた・もとゆき）

一九五四年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科助教授。ポール・オースター、ステイヴン・ミルハウザーなど現代アメリカ作家の名訳で知られる。エッセイ集『生半可な學者』で講談社エッセイ賞受賞。おもな訳書にオースター『幽霊たち』、ミルハウザー『バーナム博物館』、共編書『ロック・ビーブル101』など。

●イラスト

きたむら さとし

一九五六年生まれ。イラストレーター、絵本作家。ロンドン在住。おもな著書に『ぼくはおこった』『やねうら』『ひつじのコートはどこへいった』など。

死んでいるかしら

一九九七年 六月五日 初版第一刷発行

著者

柴田元幸

イラスト

きたむらさとし

発行

株式会社 新書館

〒一三三 東京都文京区西片二一九一八

電話〇三（三八一一）二八五一

振替〇〇一四〇一七五三七二三

（営業）

〒一七四 東京都板橋区坂下一一二一四

電話〇三（五九七〇）三八四〇 FAX〇三（五九七〇）三八四七

装幀

きたむらさとし／SDR（新書館デザイン室）

印刷・製本

図書印刷

落し・乱丁本はお取替いたします。

Printed in Japan ISBN 4-483-21038-9

死んでいるかしら

目次

I

取越し苦勞 9

ホール・イン・ワンの呪い 14

死んでいるかしら 19

国際親善ばんざい 24

目クソ、目クソを噛う 28

考えもしなかった 34

原っぱで 39

クロコダイルの一日は 44

エントロピーとの闘い 52

Hey Skinny! 56

展覧会で 61

そして誰もいなくなった 68

わかっていない 73

他人のフンドシ 78

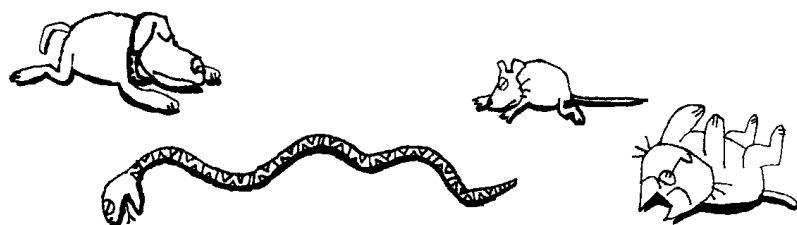
II

最高の食べ方 85

まずそうな食事について 90

飢えについて 95

においについて 100



III

文庫本とラーメン 104

消すもの／消えるもの

箱 入れる物／入る物

窓の話

122

コリヤー兄弟

130

床屋の話

137

火について

145

自転車に乗って

153

114 109

IV

エレベーター・ミュージック

163

アメリカを見る目

168

旧石器時代のはなし

172

がんばれポルカ

178

ニューヨークの空気

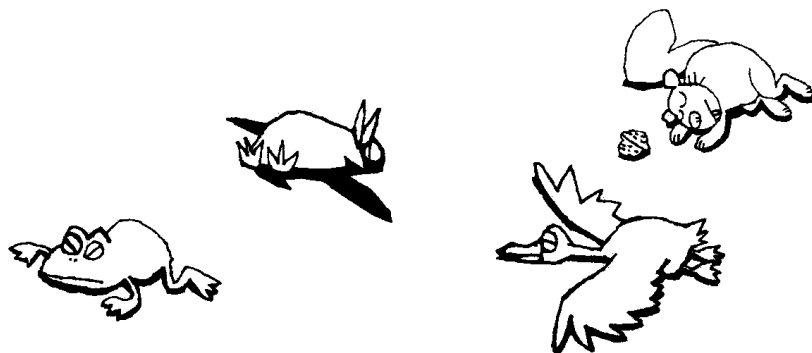
183

一本のテープ

187

あとがき

190



死
ん
で
い
る
か
し
ら

I

取越し苦勞

こういうのをまさに取越し苦勞というのだろう。何年か前に元号が変わることになったとき、僕はほんの少し不安を抱いた。

新しい元号は、「国民の理想としてふさわしいよい意味を持つ」「書きやすい」「読みやすい」ものになる、という話だった。

人間、何が理想とって、元気で幸福であることが一番ではないでしょうか。

そして僕は名前を「元幸」といいます。

もちろん読み方は「もとゆき」であって「げんこう」ではない（音読みで呼ばれる資格があるのは、吉本隆明とか安部公房とかいった、偉い人だけである）。でも電話で説明するときなどは「元氣の元に幸福の幸です」と伝えるわけだし、英語圏の人間に「お前の名前はどのような意味だ」と訊かれたら、「元氣で、幸福だってことだよ」と答えるしかない。「明るくていい名前じゃないか」と相手はたいていニコニコしながら言ってくれるけれど、何だかその笑顔は、「そういう底なしに楽天的な名前だから、人生を貫くアイロニーや悲哀が君にはわからないのだよ



なあ」と言いたげである。

だが元号にはアイロニーだの悲哀だのは関係あるまい。元幸げんこうなら掛け値なしに「よい意味」だし、間違ひなく「書きやすい」「読みやすい」。というわけで僕は、もしかしたら自分の名が元号候補として「新元号審議会」（僕が勝手に作った名称。本当は何とか知らない）で検討されているんじゃないかと、ほんの少し不安になったのである。

「いいじゃないですか、元幸げんこう。アイロニーには欠けるが、国民の理想としてふさわしいよい意味だ」

「そうですね。人生の悲哀が伝わらないうらみはあるが、書きやすいし、読みやすい。いいじゃないですか」

——と、審議会の進行状況を一人で勝手に想像して、僕は少しうろたえてしまう。そこであわてて「反元幸派」を登場させる。

「しかし、ゲンコウは元寇に通じますぞ」と審議会の中心人物の一人である日本史学者が言う。「賊が攻めてくるような印象を与える元号というのは、いかがなものか」

「それに天文学で減光といえ、天体からの光が観測者に達するまでに受ける減衰のことをいいます」と審議会に加わった数少ない科学者の一人が言う。「減光は銀河面内で特に大きく、暗黒星雲のないところでも一キロパーセクあたり可視光で約〇・三等、これが暗黒星雲を含むよ

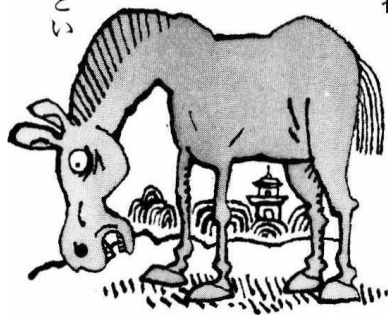
うな方向では何と三等級にまで達するわけです」。ほかの委員たちの目が点になっているのに気づいて、彼はあわてて結論に移る。「暗くなることにつながる元号というのは、いかがなものか」

「しかも生物学で原口といえど」と審議会唯一の女性委員である生物学者が言う。「胚発生の際、胚期終了、^{（うづはい）}囊胚形成時に生じる細胞の陥入口を指すわけで、後口動物

の場合、原口またはその付近が肛門となるわけです。肛門を連想させる元号というのは、いかがなものでしょうか」。総じて理科系の話に弱い委員たちは、早くも何人かが居眠りをはじめている。

「そして言うまでもなく、中国で玄黄といえど、馬の病気をいいます」と著名な漢文学者は言い、一同はいかにもそれが言うまでもないことであるかのように頷く。「玄は玄人^{（くろうと）}に見るごとく黒を表わし、黒い馬が病気をすると黄色くなるのです。馬の病気を想起させる元号というのはいかなものか」

結局「いかがなものか派」が「いいじゃないですか派」を上回り、僕の想像のなかの新元号審議会において「新元号 元幸」はめでたく否定されたのであった（あとで知ったのだが、「ゲンコウ」は鎌倉末期に元亨、元弘の字ですでに二度元号として使われている。今日では以前使われた元号は使わない方針というから、僕の心配は、本当にまったく百パーセント掛け値なし



の取越し苦勞だったわけである)。

名前を決めるというのは非常な決断を要する行為だと思う。僕は子供もいないので、幸い大きな決断を迫られたことはない。せいぜい自分の本の題に悩んだくらいのものである。はじめのエッセイ集を出すことになったとき、「生半可な學者」というタイトルにしようと思うんだ、と僕が言うのと、「だって君は學者として本^{ほん}当^{あた}に生半可じゃないか」と友人の一人は呆れて言った。「それじゃ全然シャレにならないよ」

それもそうだとは思ったのだが、生半可という言葉の^{だらけ}た感じが気に入ったので結局これにした。僕は「堅忍不拔」とか「氣焰万丈」とかいった凛々^{りんりゃ}しい四文字語より、「自墮落」「大雜把」「太平樂」「頓珍漢」といった生ぬるい三文字語が好きなのだ。

自分の本ではないが、勤務先の大学で作った英語の教科書のタイトルを決めるのにも苦勞した。一冊目 *The Universe of English* は割合すんなり決まったが、二冊目はけっこう迷った。結局正攻法で *The Expanding Universe of English* (膨張する英語の宇宙) と行くことにし、評判もまずまずだった。

ところが、学生たちが作った *Expanding* の訳本を入手したら、ちゃんと本物と同じ判型で作ったその手作り冊子は、その名も *The Shrinking Universe of English* (収縮する英語の宇宙) となっているではないか。しかも、こっちが精一杯つっぱって書いた序文もしっかりもじ

ってあって、「英語を読む」ではなく「英語で読む」のを助けることを私たちはめざした」という箇所なんか、「英語を読む」ではなく「日本語で読む」のを助けることを私たちはめざした」となっている。

やられた、と思った。こっちはいつまでも教師のパロディをやってるつもりでも、学生たちから見ればとくに、嘲笑しパロディすべき「権威」になってしまっているわけだ。

いづれ続編を作る予定だが、今度はいっそ *The Exploding Universe of English* (爆発する英語の宇宙) で行こうかとも思っている。そしたら訳本にはどんな題をつけてくるか。

(※「新元号審議会」の審議内容は、『平凡社世界大百科事典』『大辞林』をほぼ丸写しさせていただきました。)

ホール・イン・ワンの呪い

英語で four-letter word といえど f * * * k とか s * * * t とかいった汚ない言葉

のことだが (fork や salt がなんで汚ないんだ? とする人は英語の勉強法が真面目すぎます)、日本語においては、新しい商品や制度は四文字化されることによつて日常世界への仲間入りを果たす。ワープロ、パソコン、ゼネコン、レンコン (こりやはじめつから四文字か)、リストラ、コンビニ、ブルセラ (これが「ブルマー+セーラー服」の謂

だとは知りませんでした)。みんな四文字化することによつて、現実という共同幻想の確固たる一部となる。

前からあつた制度についても、四文字化は現在急速に進んでいる。大学生の会話を聞いていると、ゲームセンターはゲーセン、家庭教師はカテキョー、一般教養はパンキョー。昔だつて「デカンショ」とか言つてたわけだが、とにかくいまやほとんど何でも四文字だ。

逆に、「アイデンティティ」という言葉がいつまで経つても「アイデン」とか「アイデテ」にならないのは、「自己同一性」という概念が日本人にとつて依然なじめないものであるという事

